

福島市総合教育会議記録(第3回)

平成27年11月20日(金) (庁議室)

13時45分～14時37分

出席者(6名)

市長	小林香	教育委員	中村恵子
教育委員長	芳賀裕	教育委員	佐藤玲子
教育委員	大野順道	教育長	本間稔

陪席者(2名)

副市長	安齋睦男	政策統括監	紺野喜代志
-----	------	-------	-------

事務局出席者【総務部】

総務部長	高梨敏則	総務課長	三浦裕治
総務部参与兼次長	羽田昭夫	総務課係長等	

事務局出席者【教育委員会】

教育部長	菊地威史	文化課長	齋藤義弘
教育部次長	熊坂俊則	保健体育課長	寺内勝宜
教育総務課長	矢吹淳一	中央学習センター館長	齋藤弘之
学校教育課長	古関明善	こむこむ館副館長	千葉修
生涯学習課長	會澤和夫	図書館長	佐藤広明
		各課係長等	

1 議題

1. 開 会

2. 市長あいさつ

3. 協 議

(1) 新教育振興基本計画の素案について

(2) 新教育振興基本計画と大綱の関係及びスケジュールについて

4. 意見交換

新教育振興基本計画で取り上げる「学校教育の充実」の中で、特に『確かな学力の育成』をテーマに意見交換

(1) 全国トップレベルの学力の育成をはかるために

(2) グローバル化に対応する子どもの育成のために

(3) 家庭の教育力を生かす連携や実践を推進するために

5. 閉 会

午後1時45分 開 会

(三浦総務課長) それでは、ただいまより第3回目となります平成27年度福島市総合教育会議を開会いたします。進行を担当させていただきます総務部総務課の三浦と申します。よろしくお願いいたします。お手元に配布の次第のとおり進めさせていただきたいと思っております。

初めに、小林市長よりごあいさつを申し上げます。

(小林市長) はい。皆さん、どうもこんにちは。

【「こんにちは。」と呼ぶ者あり。】

(小林市長) 平成27年度の第3回福島市総合教育会議の開催にあたりまして、ごあいさつ申し上げます。本日は教育委員の皆様方、本当にお忙しいところお集まりをいただきまして、大変ありがとうございます。そして常日頃から福島市におきます教育につきまして、本当にご尽力いただきましてありがとうございます。

10月の第2回会議におきまして教育長から教育振興基本計画の素案についてご報告をいただきまして、その内容につきましては、私からも少し意見などを述べさせていただきました。その後、教育委員の皆様からのご意見も十分に反映された内容に精査されているというふうに聞いているところでございます。

本日は、素案についてのさらなる協議とともに確かな学力の育成をテーマに私の考えも少し述べさせていただきながら、今後の教育のあるべき姿につきまして皆様とご意見を交換させていただければと思っています。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(三浦総務課長) ありがとうございます。早速でございますが、それでは3番の協議と合わせて4番の意見交換を行いたいと思っております。本会議の設置要綱に基づきまして、小林市長に進行をお願いしたいと思います。

市長、よろしくお願いいたします。

(小林市長) それではしばらくの間、議長を務めさせていただきますのでご協力のほどよろしくお願いいたします。

本日は、協議事項が2点と意見交換でございます。はじめに協議事項(1)新教育振興基本計画の素案についてでございます。内容につきましては、教育長より説明をお願いします。

(本間教育長) はい。教育振興基本計画の素案についてでございます。前回の総合教育会議の協議の結果を踏まえまして、それからその後に教育振興基本計画の策定委員からの意見等も聴取いたしまして、お手元でございますように福島市教育振興基本計画の素案が別冊のとおり決定しました。それで、前回から細かい部分で、策定委員からの意見の部分も入っておりますが、他に施策の基本方針の部分で大きな変更がありました。

39ページを見ていただければいいですかね。他のところにも出てまいります、豊かな心の部分で、施策の基本方針ということで、郷土への理解を深めるとともに、という文言を追加してございます。前回の総合教育会議の協議の結果を踏まえた形で、郷土への理解

を深めるとともに、という部分が大きな変更でございます。あとは、小さな文言変更等でございますが、このような形で別冊としてまとめました。今後、パブリックコメントを実施いたしまして、市民の皆様から意見をお伺いしまして、基本計画に盛り込んでいって計画案を作ってまいりたいと考えております。

以上でございます。

(小林市長) はい。それでは、ただいまの説明につきましてご意見のある方は、お述べいただければと思います。いかがでしょうか。

皆さん特段ございませんか。

【「はい。」と呼ぶ者あり。】

(小林市長) よろしいですか。

【「はい。」と呼ぶ者あり。】

(小林市長) それではご意見等特段ないようでございますので、ただいまの報告内容を了承するというところでよろしいでしょうか。

【「はい。」と呼ぶ者あり。】

(小林市長) わかりました。それではそのようにいたします。それでは次に協議事項の(2)新教育振興基本計画と大綱の関係及びスケジュールについてでございます。内容につきましては、総務課長から説明をお願いします。

(三浦課長) はい。資料の3ページをお開きいただきたいと思います。新教育振興基本計画と大綱の関係及びスケジュールについて、記載をさせていただいております。左側は教育振興基本計画、右側が大綱となっております。4月、また先月にですね実施をさせていただきました総合教育会議の中でもお話をさせていただいておりますが、今後の計画等について若干確認をさせていただきたいと思います。

先ほど教育長のほうからありましたとおり、教育振興基本計画につきましては、来月の7日から年明けの6日までにパブリックコメントを実施する予定であります。その内容を踏まえまして外部有識者による計画策定委員会の中でこちらの原案について、協議をさせていただくと。最終的に2月3日、定例教育委員会の中で教育振興基本計画は決定されるというような予定でございます。それを受けまして、こちら総合教育会議のほうでは最終的に2月3日に決定されました教育振興基本計画についてそのものを大綱とする、という今までの総合教育会議のご意見、予定がありますので、今のところ日程につきましては、まだ未定となっておりますが、2月の中旬に開催させていただきたいというふうに思っております。こちらの説明については以上でございます。

(小林市長) はい。それではただいまの説明につきまして、何かご意見等あればお願いいたします。よろしいですか。

【「はい。」と呼ぶ者あり。】

(小林市長) それでは教育振興基本計画と福島市における平成28年度からの教育・芸術・学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱との関係でございますが、教育振興基本

計画中の基本理念や基本目標、基本方針につきまして、総合教育会議において、私と教育委員会の皆さんとで協議し、調整してきたところでございます。

私としましては、当該部分をもちまして平成 28 年度以降の教育の大綱として位置づけたいと考えているところでございます。今後パブリックコメントを実施しまして、広く市民の意見を聴取しまして基本計画に反映させますとともに、来年2月に開催を予定しております第4回総合教育会議におきまして、福島市の教育の大綱を決定したいと考えております。

なお、今後のスケジュールにつきましては、ただいま確認した内容で進めていきたいと考えております。

それでは続きまして、新教育振興基本計画で取り上げます学校教育の充実の中で、特に確かな学力の育成をテーマに私と皆様とで意見交換を行いたいと思います。

まず、1つ目の視点の全国トップレベルの学力の育成でございますが、私は福島市の子どもさん達の学力ということ考えた場合に、やはり子どもさん達の将来のことを考えますと、確かな学力というものが必要ではないかというふうに思っております。

これは、ご家族あるいはいろいろな関係の方々のお思い、それぞれあるとは思いますが、私は子どもさん本人の将来のことを考えた時に、やはりきちんとした学力を身につけさせる、あるいは、身につけられる環境を整えるということは、我々行政あるいはこの地域社会の責務ではないかというふうに思っております。

そして、福島市内の子どもさん達は平均して、あるいは総じてですね、総合的な、基礎的な能力というものを持っているものと思っております。ですから本来持っている能力に見合った学力はつけられる、あるいはつけさせられるそういう環境を作っていくべきではないかというふうに考えているところでございます。

そして、これは違った視点ではございますが、福島市の活力ということ考えた場合、この市内の産業の振興、現在市内でこの事業を営んでいらっしゃる企業の皆さん方が、人材を募集する際にも、やはり総合の学力あるいは人間的資質を持った人材を求められています。それは私が企業を訪問するたびにそのような話を伺います。

そして、また今後の福島市の活力ということ考えた場合には、さらなる企業誘致が必要でございますけれども、その際にですね、福島市内に工場なりを造る際にどういうものを現地で求めるかという話を伺いますと、そこには必ずですね、優秀な人材が現地でとれるかということをおっしゃる企業さんが圧倒的でございます。ですから、この子どもさん本人、そして福島という地域の今後の発展ということ考えた場合にも、やはりこの子どもさんの学力というのは大変重要であるというふうに思っているところでございます。こんなことを私は思っているところでございますけれども、こういうことについてもご意見をいただければと思います。

まず、教育長から福島市の学力の実態と課題について説明をお願いいたします。

(本間教育長) 学力の実態についてでございますけれども、2つの指標、1つは、全国学

力学習状況調査、それから県でやっております県版学力テストがございます。この2つの指標から学力の実態についてお話したいと思っておりますけれども、26年度、昨年度でございますが、小学校の場合には小学校6年生ですけれども国語A・Bっていうふうに分かれておりますが、基礎的な問題と思考を問う問題とあるわけですけれども、国語それから算数とも26年度は小学校のA・Bとも全国平均を上回っているか、全国平均というような形でございます。

27年度は残念ながら算数のほうのA・Bともに全国平均を下回る結果、理科は全国平均を上回っています。

それから中学校ですけれども、26年度、27年度ともに国語のA、基礎的な部分では全国平均を上回っておりますけれども、国語のB、それから数学のA・Bともに全国平均を下回っております。ただ、26年度と27年度を比較した場合に全国との差、27年度は全国との差が1ポイントを割っております。0.8とか0.7とかという形で1ポイントを割った数字になってきていますので、全国平均にだんだん近づいてきている、ほぼ全国平均並みになってきているのかなということでございます。

それから県の学力テスト、昨年度小学5年生と中学2年生をやっておりますけれども、昨年度の小学校5年生の国語、算数、理科、それから中学校2年の国語、数学、英語、これは県平均をともに上回っています。それから27年度は、先週実施したばかりで、これはまた結果がくると思いますので、結果がきた段階で皆様にご紹介申し上げたいと思います。

課題としては学力を上げる1つの方策は、やはり教員の研修を含めた、学習指導の充実、これが非常に重要で、どうしても教員の指導力向上、これがやっぱり大きな問題かなと。

それからもう1つは、今標準学力検査というのを本市独自で小学校2年生、4年生、6年生、それから中学校1年生と3年生に全国標準学力検査というのを実施しておりますけれども、これに基づいて一人ひとりの能力といいますか、そういったその対応した指導の充実が図られることを目的として、これをやっているわけですけれども、これをいかした形で一人ひとりについて学力の向上をみていくことが必要なかなと考えています。

昨年、教育委員会と現場の先生方とともに秋田県に視察に行きました。今年は福井県に行っております。それで聞き及んでいるところだと、福井県の教育長さんは当たり前のことを当たり前に行っているだけなのだという話ですけれども、やっぱりそういった意味の学習指導の充実とか、子ども一人ひとりに配慮した学習指導をやっていくとか、これは当然当たり前のことですので、これをさらに市としても充実させていきたいなというふう考えています。以上でございます。

(小林市長) はい。今教育長から学力の実態、そして教員の研修、指導力の向上の必要性、そして子ども一人ひとりに合わせた指導の充実の必要性、そして秋田の視察、それから福井県にも視察に行かれたということでございますけど、芳賀委員長いかがでしょうか。

(芳賀教育委員長) 学力向上という一朝一夕にはなかなか難しいということがありますけれども、やっぱり教育というのは、人格の形成を目的としていると私は思うのですね。

その人格形成に大きな役割を果たすのがやはり教員の先生方の果たす役割が大きいと思っています。先生方は今もいろんな面で努力されているわけですが、私は先生方に3つ期待したいものがあります。

1つ目は、もちろんご自分の教育の指導力を磨くということで当然のことでありまして、子ども達の学力を伸ばすということは、最大のものだと思います。

2つ目は、先生方教員がですね、自分の専門の学問というか教育に全精力を傾けてというのではなくですね、やはり社会に目を向けて、今の世の中の動きもきちっとわかってですね、そして自分をそういう意味でも磨いていくということがこれからは必要だろうと思いますね。特に18歳以上の選挙権ということもありますので、子ども達の人格を形成するためには、世の中というものを先生方自身もきちっとわかっていないといけないと思いますのでそれは大切なこと。

あと3つ目には、子ども達、児童、生徒に先生方が接する時間、これをもっと作っていかなくちゃいけないのだろうなど。先ほどの教育長のお話のように一人ひとりの子ども達の学力を伸ばしていく、特性を伸ばしていくというためには、やはり個々人の児童、生徒を知らないといけないということもありますので、個々人の児童、生徒と接する時間を多くするということが先生達には望まれると。

それで、そういったことを考えますと教育行政の中では、やはり先生方にそういう自分を磨く、社会を知る、子ども達と接する時間を多くとっていただくという環境を、教育行政としては作っていかなくちゃいけない。大きなことは事務的な作業が今、先生方に重くのしかかっているとされています。年々いろいろな報告なりなんなりが増えてということもありますので、そういったことを整理していく、先生方が子ども達の学力向上に専念できるような環境づくりを我々としては、やっていかなくちゃいけないのだなと思っております。

(小林市長) はい。続きまして、学校訪問など佐藤委員もなさっているということでございますけれどもどうでしょうか。いかがですかね。

(佐藤委員) はい。今日も午前中、北沢又小学校を伺ってきたところだったのですけれども、本当にごく僅かな、小学校だと1校時の45分間のうちに6クラスくらいを見て歩くのですから、本当に分刻みで見て歩くので、限られたところしか多分見ていないと思うのですが、それでもやはり子どもさん達の思考力を引き出すような、知識を教えるというよりは引き出すような形で授業を進めているところを見た時はすごいなって、ちょっと思いまして、そういう意味ではいろんなクラスを見せていただいて、やはり多少差があるのかなというのを感じる瞬間は多々ありました。

なので、先ほどは本間教育長からありましたように、教員の皆さんの研修とかそういったものが重要になってくるのかなというふうに思いました。特に先だって伺いました野田小学校が思考力を高めるということを研究課題にし、その発表だということで見せていただいたのですが、教員の方が資料を作られるのですよね。自分で作られた資料をも

とに教えられていて私が拝見したのは、オリンピック選手の弦くんでしたっけ。アイススケートの方で、彼はあの時、「本当に今ここで滑っていいのだろうか。この瞬間滑っていいのだろうか。でも僕はオリンピックを目指すのだ。」っていうその心の遍歴をたどったことを丁寧に教えていらしたものですから、それを生きる力とか、そういった思考力っていうのは確かに学力では見えにくいかもしれないけれども、ゆくゆくは10年後、ひょっとするとそれが福島に帰ってきて何かをしようとかそういうものにつながっていくのではないかなというふうに、すごく感動してその授業を見せていただいたのです。そのような研修といますか、そういった教員の方々が一定の力を持つようになっていくとそういったものがあがっていくのかなというふうに思って拝見させていただきました。

(小林市長) はい。ありがとうございます。いずれももっともな感じがいたします。大野委員はいかがでしょう。

(大野委員) はい。そうですね、学力向上ということでございますが、これにつきましてはやはり先生方ですね、教育に対する情熱がだいぶある先生とない先生がいらっしゃるんじゃないのかなと感じます。やはり先生が情熱を持っていると子どもさんに伝わるじゃないか、伝わるためには子どもさんが授業に集中してもらわないと、ということがあります。

禅語でいうと啐啄同時って言葉がありますけれど、親鳥が上から突くのと、ひなが中から突くのとそれが同時でないといけない。そうすると卵が割れる、生まれるなんてことがあるのですけれども、そっぽを向いて、他を向いてではなく、集中して余分なく伝えるとしないと、向き合った授業にならないが、そういうような授業に私も学校訪問をしていると何度か会っていますし、そうではないちょっと残念だなという先生もいらっしゃるかもというふうに思いました。

(小林市長) 中村委員はいかがでしょう。

(中村委員) 佐藤委員さん、大野委員さんは、いろいろな先生がいらっしゃると思うのですが、ただ私が拝見しますと学校の先生方は、非常によくやっっているというふうに思います。素晴らしい先生もいらっしゃいますし、そうじゃない先生も時々はあるかもしれませんが、それにしてもやっぱり教育に情熱を持って子どもに一生懸命接しているっていう姿はわかりますので、今福島市の学校の先生方は、とてもよくやっっている。ただそれを本当に学力向上までの結果として、例えば数値としてそこまでに結びつけるというのは、やっぱりもっと時間が必要かなという気がしています。一番は時間かなと。それは自分の研修、自分を磨くための時間ということもあるでしょうし、教材を作る時間ということもあるでしょうし、子どもと向き合うための時間もあると思います。

そういう意味では、いかに先生方が自分で教えることを向上させる時間を作れるか、それをいかにサポートできるかっていうのが、私達の課題なのかなっていうふうに考えております。そういうことから言いますと、ここからその市長がお考えになるのかと思うのですけれども、やっぱり人材としてマンパワーを学校の中に入れていけると先生方の時間を

作ることになるのじゃないかなっていうふうに思っています。

それで、例えば今、学習支援員とか学校向上サポート事業という形で入っていたりとか、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーとかそういう方達が入っていますが、そういった人達の力を使って、本当は先生方がやらなくてすむべきところは専門家にまかせていくということが必要なんじゃないかなというふうに思います。

できればですね、財務省からは全国的に教員削減ということがいわれていますけれども、教育こそが将来への投資ということで考えますと、いかに手厚く先生が学校に入るかということが重要なというふうに思いますので、先生を支援する人達とともに先生の数も増えていくと教育も充実していくし、学力も向上すると思います。できれば市長も首長会議とかありましたら、そういうことについて、是非ご発言をいただくと助かるなと思っています。

(小林市長) はい。わかりました。ありがとうございます。まあ確かに先生方に十分な余裕がなければ、十分な教育ができないだろうということはよくわかります。ではそのためにも教員、人材の確保でしょうかね。それと先生方のレベルアップと両方必要であろうと思います。そういう意味では、今中村委員から要望がありましたけれども、国に対する要望といましようか、そういうご意見でございましたけれども、国に対しても何らかの形でですね、要望していきたいと思っています。

そして教育委員会の皆様と連携してですね、可能な限り予算措置も考えていければと思っていますところでございます。そして教員の研修でございますが、今後中核市になった場合ですけれども、その場合には教員研修は中核市がもつという移行のメリットを最大限にいかせることとなりますので、そのための指導主事の増員ですね。そういったことも考えていければと思っています。そうした形で全国トップレベルの学力の育成という目標を何とか実現できればというふうに思っているところでございます。

それでは次の2つ目の視点でありますグローバル化に対応する子どもの育成でございますけれども、教育長から現在の状況の説明をお願いします。

(本間教育長) はい。グローバル化に対応する子どもの育成ということで、2つの視点があると思います。1つは現在行っている外国語教育、英語教育をどう充実させていくのかという視点と、それからもう1つは、やっぱりグローバル化を支える根底になるというか、そういった意味での子ども達のアイデンティティというか、福島をよく知って、そして、福島から巣立っていくための素地作りという部分があると思います。

それで、1つ目の英語教育については、現在、渡利地区の小・中学校で、英語教育連携推進事業というのを行っています。小・中学校の英語教育を連携させて、英語教育を強化していこうという事業を本年度から行っています。特に英語の指導力向上ということですが、平成30年度から学習指導要領の先行実施で小学校3年生、4年生からの英語教育がおりてきます。それから32年度は完全実施になりますから、それに向けて、今の段階でもう3年生、4年生の段階に向けての試行的

といいますか、何らかの指導力も含めた形でモデル地域を作って、英語教育を3年生、4年生へ落とすような形での今計画というか、予算も含めて立てているところです。

それからもう1つのグローバル化の根底になる部分、子ども達のそのなんていいますかね、基盤を作るっていう部分で今、小学校でやっているふくしま・ふれあい・夢ぷらんとすることで国際理解だとか、環境問題だとか、郷土理解だとか、そういった形での事業、それから中学校でやっている世界に羽ばたくふくしまっ子育成事業ということで外部講師を呼んできて国際的な話もあるでしょうし、いろんなその地域の部分もあるでしょうし、そういったことも含めたような形での事業展開ということで英語教育とグローバル化の根底となる部分での事業展開を今やっているところでございます。簡単ですけども。

(小林市長) はい。私も自分のこれまでの業務の経験などからしても、外国語の教育は重要ではないかなと思っていますけれども。

中村委員いかがでしょうか。

(中村委員) はい。そういう意味ではグローバル化といった時には、2つの視点があるかなと思っています。普通の教育としては英語をツールと使うための様々な教育が必要かなって思っています。そういった場合には、いかに生の英語に触れる機会を増やすかということだと思っていますので、現在の中学校とか小学校には外国語を話すALTさんとか、外国の文化について紹介するEAAの方とかがいらっしゃるのですけれども、一人で何校も掛け持ちという形で、そんなに頻度も多くクラスの中に入れるわけじゃないのですね。ですから、そういった意味ではもちろん学校の先生達も一生懸命やっついていらっしゃいますが、生の英語に触れる機会をなるべく多く持つという意味では、そういう人達の配置を多くしていくといいかなというふうに思っています。そしてツールとしても英語が使えるようになってほしいなとも思っています。

もう1点は、教育長もおっしゃっていたのですが、やっぱりベースとしての中身を作る、外国人と話をした学生さんなんかに聞きますと一番困るのが、日本のことを聞かれて話せなかったということをするのですね。日本のこともそうなのですが、福島はそういった意味では全世界的に有名になってしまいましたので、「福島ってどういうところ。」って必ず聞かれると思います。ですので、自分の育ってきたところはこんなところなのだよ、ということから自らこの場所にいながら学べるような、そのベースがないと英語は使えても話す中身がないようになってしまわないようにしたいなというふうに思っています。そういった意味でのいろんな事業を展開してくれたらと思います。

(本間教育長) いいですか。ちょっと補足ですけども、ALT、人数的には9名おります。それからEAAという外国語活動の指導協力員、これは日本人ですけどもこれは今、12名配置をしています。これは将来的には増やしていきたいとは考えています。

(小林市長) はい。佐藤委員はいかがでしょう。

(佐藤委員) はい。中村さんと同じような内容なのですけれども、例えば英語という授業にだけALTの先生が入るのではなく、もっと場を広げて例えば体育の授業だったり、音

楽の授業だったり、体を動かす時とか、他の授業で耳から入ってくるとか、そういった機会を増やすという意味では、そういうことも文科省で決められたあれでは難しいのかもしれませんが、そのへんの配慮ということは、できなくはないのではないかなと思っています。

(小林市長) テレビのコマーシャルなどで英語の教材でなんとかラーニングとかありますけれども、確かにそういう形での、学校教育においても耳にする機会が多ければ確かに効果が上がるのかもしれませんが。

それでは、芳賀委員長いかがでしょうか。

(芳賀教育委員長) はい。グローバル化は先ほど中村委員がおっしゃったように、その海外に出ていかに日本のこと、福島のことを知らなかったのかと思知らされるということ、よく海外に行った方から聞かされる、そうだなと思いますね。そういうことなのですから、英語をいかにして身につけるかっていうところは、子どもも大人もそうですけれども、学ぼうとする意欲があって初めて英語が身につくのだらうと思いますね。それで、学ぼうとする意欲をどうやって持たせるのかということを見ると、子ども達が自分は何に興味を持つかというのは、いろいろな経験を自分でするっていうわけにはいかないんで、読書がですね、その多様な経験をさせてくれるっていうか、多くの本を読むということがいろんな世界を知る、いろんな物事を知る、ということで一番大切だと思いますね。

そうすると、その読書を通じて自分が興味を持つ、その人物であるとか、物であるとか夢であるとか、そういったものを外国のことを知りたい、それは英語を通じて知りたい、というところに持っていくのが一番早いのかなと私は思っております。

それで、振り返ってみて中学校からずっと英語を我々はやってきているわけですが、では今ぺらぺら喋れるかといったら全然喋れないし、聞いても理解ができないという状態なわけなのですね。ですから意欲をもって集中的に英語は学ばないといけないなど。それで小学校の学校訪問を今日もさせていただいて、英語の授業を見てきましたけれども、子ども達にいかに興味を持たせようかということ先生が一生懸命やっておられる。本当に大切なことだと思いますが、今申し上げたように、読書を通じて子どもがいろんな世界を知る、そのためにもっと知りたいと思って英語に入っていく、というような進め方もあるのだらうなというふうに思いますね。

市長は、よく外国でいろいろ会議に出たりとか、お話をされているわけですが、その英語を身につけるきっかけといいますか、どんなところからそういうふうになられたのかなと……

(小林市長) そうですね。あまり今日は時間もないですから、手短かに申し上げますけれども、いずれまたお話する機会でもあればと思いますが、勉強の仕方としてももちろん学校、中学校の時も授業は大切だったわけですが、あとはラジオ講座ですか。基礎英語っていいましたかね、ああいうのをずいぶん聞いていましたね。

あと私は、大学の時はドイツ語だったのですが、役所に入ってからフランス語の

勉強を始めたのですが、それもやっぱりラジオ講座が最初でフランス語のラジオ講座、NHKのラジオ講座はレベルが高いですね。あれだけでもかなり勉強になりましたし、私は仏検の2級までとったのですけれども、最後は語学学校に通ったりしましたけれども。

あとは、単純にその外国語としての興味を中学の時に持ったこともありますし、フランス語の勉強をし始めたのが、仕事で使う可能性が出てきたということも余計にありますね。もともとフランス語にも関心があったのですけれども、国際機関に勤める可能性もあったので勉強をやっておこうかなと思って始めたってところですかね。そういう意味では好奇心とか、あとは必要性ってところなのではないでしょうかね。そこをこの意識、認識できれば、より勉強の意欲がわくというところなのかもしれませんね。

(芳賀教育委員長) ありがとうございます。

(小林市長) いえいえ。それから、中村委員の話の中にこのベースとしての中身を作ることが大切だという話がありましたけれども、やはりこのグローバル化の中です、このアイデンティティーってことを考えるべきですね。日本のことを的確に説明できるか、あるいは我々にとって福島のことを語れるかということが大事なのだと思いますね。私も福島に戻ってきて、改めて感じたことに福島の市民の皆さんが意外に、我々福島市民、結構誇れる歴史があるのですけれども、それを知らない人が結構多いなというふう思ったのですけれども、大野委員、いかがでしょうかね。

(大野委員) そうですね。やはり先ほど何度もお話が出ているように、日本の文化ですか、道がつくやつですか。茶道、華道、剣道、柔道と道がつくものにそれぞれ、皆さん興味持っていたいたのですが、まずやはり郷土のこと、歴史をちゃんと学んで、後々に自分が語れるということが、海外に行ってもどこへ行っても役立つのじゃないのかと思います。

(小林市長) はい。それでは3つ目でございますが、家庭の教育力を生かす連携や実践を推進するという視点でございますけれども、家庭の教育力に関して皆さんはどのようにご覧になっているのでしょうか。佐藤委員、いかがでしょうか。

(佐藤委員) 生活習慣とか学習習慣などを含めてですけれども、震災以前からなのからちょっとそのあたりは私もよくわかりませんが、特に気になるのが家庭の疲弊と申しますか、格差が子どもに影を落としているのではないかなというふうに思っています。

先だってもある小学校に行った時に学力が二極化していると。そこはベットタウンだったりするものですから、自分で家をお持ちの方のお子さんだったりすると教師が何も言わなくても自分から勉強するけれども、どういう言い方したらいいのかあれですけれども、一部ではやっぱり親御さんとかも子どもに目が行き届かなかったりしている。そんなところで二極化しているという話も伺いました。なので、例えば、先ほどは先生向けのスキルアップのお話がちょっとありましたけれども、保護者向けのそういったスキルアップのような機会を作ったとしても、そこに来てくれるだろうかというぐらいなのかなというふうに思って、ちょっと深刻かなというふうに思っております。

(小林市長) 大野委員はいかがでしょうか。

(大野委員) そうですね。やはり家族の絆を深めることですか。秋田のほうの学力が高いところでは三世代が同居する割合が高いというようなことを聞きました。福島も多いほうだと思うのですが、それがいかされるかどうかっていう問題だと思うのですけれども。身近な人からの教えや考え方、地域の方々とのふれあいの場を多く持つことによってですね、親も地域の人から教わる、子ども達も学ぶ、これは三世代に限らずですね。私の経験としては、家に帰ってきて誰もいなかったら隣のおばさんが、「お母さん帰ってくるまで大丈夫だよ。」とか、そういう周りの人で見守っているようなそういうものがあったと思うのです。そういうようなことが大切なことではないかと思っております。

(小林市長) はい。そうですね。確かに1つの家族の中、家庭の中での教育環境の場の整備っていうことも大事ですし、地域で子どもを守っていく、育てていくっていう発想がこれからは必要ではないかなって気がしますね。

確かに私も育った世代、時代においては、地域が1つの家族みたいな、なんとなくそんな雰囲気があったわけですが、それが核家族化の進行とともにそれぞれの家庭がこの孤立というのか独立というのか、そういう感じになってきているような気がしますね。それが子どもの環境、育つ環境にもある面では確かにマイナスの影響を与えているような気がしますので、我々のこの福島においても、何とか少しでも温かい雰囲気にもっていければいいなと思いますね。

芳賀委員長、いかがでしょうか。

(芳賀教育委員長) そうですね。昔から学校、地域、家庭とそれが子ども達を育てる土壌なのだということが言われていますけれども、家庭は家庭で今、市長がおっしゃるように核家族化が進展して、福島ではないのですけれども、2歳の子どもにタバコを吸わせるとかいうような若い親がいたりとか、そういうことも今、時々でてきたりというふうに、憂うべき家庭が多いといいますかね。そういう問題も当然ありますが、ましては、地域においては横のつながりが希薄になってきていて、地域で一緒に何かをするというのがなかなか難しいというか、新興住宅地など特にそうだろうと思いますけれども出てきていると。地域で例えば運動会をする、文化祭をするというようなこともそうですし、学校によってはPTAでそういった親と子どもと一緒に活動する、そういう授業を考えていく、やっていくということがこれからもっと必要になってくるだろうなというふうに思います。親と子どもがPTAと一緒に活動して、例えば地域を親子で巡るとか、私がPTAの頃よくやっていたのが地域の昔からの名所っていいですかね、そういうところは親も知らない。それで子ども達と一緒にそこを回らせる。クイズとかいろいろ作ってですね。そういうふうな地域巡りをさせるとかそういった活動を親と子で一緒にさせるとかというようなことをやっていたりしたのですけれども、そういうこともこれからはもっと必要だろうなと。

それからもう1つは、土曜授業が各学校で取り入れてもらっておりますけれども、その中で地域の方々に学校へ来ていただいて、いろんな特技であるとか地域のことをお話しただくとか、いろんなことができる機会だろうと思うのですね。その地域の方の職場に子

ども達と一緒に行ってそこでいろんなことを学ぶということも当然必要なのですけれども、そういった意味で地域の人材バンクっていいですかね、その充実ももう一度していかなきゃいけないなど。

学校五日制になる時に、そういうことやったのですね。土曜日、学校が休みになって子ども達が家庭に戻る、地域に戻ると、その時に地域の受け皿をどうしようっていうふうに考えた人材バンクというのがあったのですけれども、それが今少し薄くなっているのかなと。もう一度今の地域にどんな方々がおられてどういう協力をいただけるかとか、そういったこともやっぱり考えていかななくてはいけないなというふうに思います。

(小林市長) はい。ありがとうございます。

佐藤委員は、先日文科省主催の教育委員会研究協議会に出席されたというふうに聞いておりますけれども、そこで受講した研修内容について少しお話しをいただければと思います。いかがでしょうか。

(佐藤委員) はい。3つの分科会に分かれての研修だったのですが、私が出たのは、学校教育を充実させる、学校・家庭・地域の絆づくりっていう分科会に出席させていただきました。そこで紹介があったのは木更津の学校支援ボランティア活動と、それから川口市教育委員会の同じような取り組みの発表があったのですけれども、その時にとっても印象が残ったのが、先ほどから芳賀委員長のほうからも出ましたけれども、10年前では結構いた自己肯定感が低かったお子さん達が、この取り組みを行うことによって自己肯定感が高まったという結果があるのですっていう発表がありまして、それがとても印象に残りました。

というのは、先ほどから芳賀委員長のお話にもありますように、親ではない、しかも学校の先生ではない、地域の別の大人の人に褒められるという瞬間がそこにはたくさんあって、しかもそれは、やれる人たちがやれる時間にお手伝いしましょうという取り組みで、決して無理強いはしないということなので、それが例えば学校の環境整備の花壇とか除草とかそういうものもありますし、その他に部活動の支援だったり、読み聞かせとか、戦争体験を話すとか、それから家庭科の補助であったりとか、英語活動の補助であったりとか、その他に今まで福島市内で見られております安全支援ということで安全防犯パトロールというようなことがあったりするということで、それによって子どもさん達の規範意識が高まったということも結果として表れていますということもお聞きいたしました。

なので、先ほど家庭力が低くなってきたというところがありますけれども、それはひょっとしたら地域ぐるみで取り組んでチーム学校といいますか、特にこの活動は先ほどもありましたように学校の先生が学校の授業に集中できるように、他のことに神経がいかなくてすむような形で他の方達で支援していきましょうという取り組みだということなので、ここは人口が13万人だそうなのですが、50人に1人がこのボランティアに参加しているということで、参加率はかなり高く、内容は学校支援なのですが、その先につながっているのは、やっぱりまちづくりだったり、市民としての社会性だったり、そんなものにつながっていているのではないかなというふうに思って、素晴らしい取り組みだと思

って聞いてまいりました。

(小林市長) ありがとうございます。

それでは今何人かの委員から出ましたけれども、地域の人材などをいかす今後の取り組みにつきまして、教育長、どのように考えているのか少しお話をよろしいでしょうか。

(本間教育長) はい。地域の人材をいかす取り組み、それがこれからの地方創生の教育分野でのまちづくりの核になると実は考えています。

それで渡利地区で学校支援地域本部事業というものを今立ち上げて、人材バンクを作っているところです。その人材バンクを今度は渡利地区だけでなく、福島市全体に広めていってそれぞれの学習センターを中心とした形での人材バンクを作ろうと今考えています。中身はですね、今までは土曜授業とかそういう形で地域の例えば、ものづくりだとか、伝統芸能の指導だとか、それから例えば地域の講師の人っていう形で呼んでいたのですが、それを先ほど佐藤委員がおっしゃったような形で、例えば施設のメンテナンスだとか、それから簡単にいえば草むしりをやってもらうだとか、色々な形で地域の人達が学校の中に入ってもらって、ただ単にその地域の人が教えるだけじゃなくて、地域の人と一緒に学校の中に参加してもらおうということで、子ども達が地域の大人とふれあいながら成長していくようなそういったような機会を作ろうというふうに考えています。

これは学校を支援してもらってことだけではなくて、生涯学習の観点からいうと、その地域の人達もやっぱり学校を核として学習していくとか、地域と共に子ども達も大人も学習していく、育っていくというような、そういった環境をこれからちょっと福島市としては作っていきなっていくというふうに方策しています。

(小林市長) それでは、もう少し時間をとって私もお話ししたかったところではございますけども、意見交換につきましては、今回はとりあえず以上ということにしたいと思います。それではこれを持ちまして、協議は終了ということにさせていただきます。

以上で議長の任を解かせていただきます。

(三浦課長) どうもありがとうございました。他に皆様から何かございますか。

【「なし。」と呼ぶ者あり。】

(三浦課長) ないようですので、以上を持ちまして本日の総合教育会議を閉会したいと思います。

どうもありがとうございました。

午後 2 時 37 分 閉 会
